

二〇三三年一〇月六日

一陣の風に惑える蒲の絮
錦繡の森を見下ろす展望台
露しとど芳香放つ桧葉の森
爽やかや厨に鳥語きく朝
伊丹郷めぐり粕漬家苞に
秋蝶の鼓動伝はる指の先

二〇三三年一〇月五日

黄落の舞ふ古城址に佇ちにけり
境内に四国巡りや小鳥来る
稲刈を終へ地下足袋に乾く泥
天高く投手ナインへ指ぎつね
夕日いま真赭に染むる芒原

二〇三三年一〇月四日

薪として割る樹を選ぶ冬支度
茅葺の高倉抜ける秋の風
鰯飛ぶや尾鰭に銀の飛沫散り

二〇三三年一〇月三日

堆く年木積まれし一山家
銅鑼一打わつと飛び立つ稲雀
茅葺の屋根にとどまる紅葉かな
澄む水の流れの小石目を弾く
白壁のアブストラクト蔦紅葉
秋嶺を遥かに望み朝掃除

素 秀

康 子

かえる

やよい

たか子

せいじ

たか子

なつき

素 秀

千 鶴

む べ

澄 子

康 子

素 秀

澄 子

よし子

康 子

満 天

満 天

む べ

憎けれどおんぶ飛蝗は逃しやる

憤怒する仁王の顔に秋日射

夫唱婦随半世紀なる月仰ぐ

灯下親し使ひ切つたるボールペン

二〇三三年一〇月二日

灯下親し老い母と繰る聖書かな

耳鳴りかはた虫の音か寝ねやらず

鴨の来て景の定まる加茂河原

やや寒に香の立ちのぼる茉莉花茶

岬鼻の野菊は殊に色濃ゆし

秋麗や池心の島に弁財天

二〇三三年一〇月一日

ひつぢ田の青目に沁みる小糠雨

運動会見守り隊へ招待状

栗を剥く無心にひとつまたひとつ

二〇三三年九月三〇日

筆簾の闇に染みゆく月今宵

急く吾の裾濡らしたる道の露

生きてをらば金婚の日や月今宵

釣人の竿ふる沖に鰯跳ねる

うつぎ

ぼんこ

たか子

うつぎ

あひる

康 子

もとこ

む べ

澄 子

ぼんこ

千 鶴

満 天

あひる

豊 実

素 秀

うつぎ

きよえ

毎日句会みのる選・二〇三三年一〇月八日